

令和5年度第1回熊野市総合教育会議会議録

1. 日 時 令和5年11月30日(木) 午後1時30分から
2. 場 所 文化交流センター 交流ホール
3. 出席者 熊野市長 河上敢二
熊野市教育委員会
倉本教育長 根引委員、糸川委員、高見委員、北野委員
4. 事務局関係
教育委員会事務局
雑賀総務課長、伴学校教育課長、柳本社会教育課長
浦坪学校教育課長補佐、森倉学校教育課指導主事
中尾総務課長補佐、泉総務課庶務係長
市長公室
西市長公室長
総務課
吉田総務課長
5. 事 項
 - (1) 子供たちの学力向上と教員の育成支援を推進するために
 - (2) 生涯学習施設としての図書館のあり方と具体的な取り組み
 - (3) その他

雑賀総務課長 定刻になりましたので、ただいまから令和5年度第1回熊野市総合教育会議を始めさせていただきます。本日の司会進行を務めさせていただきます教育委員会総務課長の雑賀でございます。よろしくお願いいたします。

会議を進める前に配付資料の確認をさせていただきます。2種類ございます。本日の事項書と横長の令和5年度第1回熊野市総合教育会議と記載されたものです。以上でございますが、よろしいでしょうか。それでは開会にあたりまして河上市長からご挨拶をお願いします。

河上市長 皆さんこんにちは。委員の皆様方にはお忙しい中、令和5年度11月に11月の終わりになりましたけれども、第1回目の総合教育会議にご出席をいただきありがとうございます。

また日頃、当市の教育行政の推進につきまして格別のご理解ご尽

力をいただいておりますことに心から感謝を申し上げます。

さて熊野市におきましては、こどもは宝未来への希望基金によりまして、教育関係で言えば給食費の無償化あるいは子供たちのことと言えば、医療費の無償化に向けた支援等々をおこなっているところでございます。

少子高齢化が進行する中にありましてこの地域の将来を担う子供たちは家庭のみならず、市にとっても大切な宝物でございます。

その子供たちが生きる力を持って自らの人生を切り開いていくためにも、教育というのはその礎となる非常に重要な役割を果たすものと考えているところでございます。

引き続き子供たちの学びの場の充実に向けて、行政として学校家庭地域の連携強化を図りながら、力を入れて取り組んでまいりたいと考えてございます。

本日の会議におきましては、1点目として、子供たちの学力向上と教員の育成支援を推進するために、を議題として、本市の大きな課題ではあります、子供たちの学力向上、教員の授業力向上の実現に向け、今後具体的に取り組む事業等々につきまして、ご説明をさせていただきます。

次に2点目として、生涯学習施設としての図書館のあり方と、具体的な取り組みを議題に、今後、加速度を増しながら少子高齢化が進む本市におきまして、生涯学習の中心的な役割を担う図書館の効果的な運営の展開につきましてご説明をさせていただきます。

この総合教育会議を通じまして、教育委員の皆様をはじめとする関係者の方々等との十分な意思疎通を図るとともに教育政策の方向性を共有し、より一層保護者の皆さんを含めた市民の皆さんの声を反映した各種政策の推進を図ってまいりたいと考えております。いろいろな課題がございますけれども、来年度の事業に向けてのご提言を含め、ご意見をお伺いできれば幸いと存じております。どうかよろしくお願いを申し上げます、挨拶とさせていただきます。

今日はどうもありがとうございます。

雑賀総務課長

それでは事項書2番の議題に入らせていただきます。1項目目の子供たちの学力向上と教員の育成支援を推進するために、でございます。説明をお願いします。

伴学校教育課長

学校教育課の課長をしております伴でございます。

先ほど市長からもありましたが、コロナ禍を経て、学校も通常の教育活動に戻っているような状況があります。

そのような中、今回学力向上の推進と教員の育成支援を実現するためにということで説明をさせていただきます。

これまでも、本市の大きな課題でありました学力向上が、今年度の全国学力学習状況調査の結果などからも、残念ながら改善が進んでいない状況が明るみになっております。

そこで本日は、これまでの取り組みの検証に加え、新たな取り組みについても提案させていただきます。

令和6年度の事業を検討している時期でもありますので、本日ここで提案する内容をご議論いただき、来年度事業に生かしていきたいと思っております。

よろしくお願いいたします。

まず本市の子供たちの課題、先ほど申しました全国学力学習状況調査の結果から紹介をさせていただきます。

ご覧の通り結果は小中ともに全ての教科が全国平均を下回っている状況です。

特に国語については、小中ともに課題が大きく見られる状況です。

次に、ここ数年の経年結果について見ていきます。小学校ではやはり経年で見ても、国語に課題があることがわかります。

一方、中学校においても、やはり数学よりも国語に課題があることがわかります。

このように小中ともに、国語についての課題があることは明らかでありますので、この国語でもどのあたりに課題があるのかということで、昨年度もちょっと紹介をさせてもらったんですが、今年度の様子を紹介させていただきます。

昨年度は、書く事と、読む事、ここに大きく全国との差があったんですが、今年は残念ながら全ての領域で課題が見られるような状況になっています。

続いて中学校も同様なんですけど、中学校もこれまでは、書く事ということだったんですが、全体的に課題があるような状況になってきています。

今日参加の皆さんもご存知の通り、国語力というのは全ての教科の基礎学力となりここに大きな課題があるということは、学力向上に向けては最重要課題であるというふうに認識をしております。

これらの状況から、まず本市の子供たちの国語力の向上が必須であるというふうに考えております。

次に全国学力学習状況調査では、質問紙調査というのもおこなわれています。ここでいくつか特徴的なものを見ていきます。

この一番左端にあります白丸、この白丸は全国を上回っているもの、それからこの黒丸の方は全国平均を下回っているものになります。

まず、白丸の方なのですが、小学校ですけれども、ICTの活用は全国よりも7.6ポイントこれ週3回以上使っているところなんですけれども、それから算数の授業の内容がよくわかるかというのも、12.8ポイント上回っているような状況があります。

その一方で授業時間以外に家でどれくらい勉強するかという割合、これ土日も含めてです。

それが全国平均を大きく下回っています。

それから三つ目の黒丸のところですが、読書をするかと、これ学校の授業時間以外についていうことでいくと、これも全国平均を大きく下回っている状況があります。

そして本市の課題でもある国語ですが、国語の勉強は好きですかというのが、全国平均を下回っているということが見えてきています。

同じく中学校です。中学校でもICTの活用が非常に進んできています。

特に中学校は、英語の授業でICTを活用してわかりやすい授業を実践している教員もおりまして、そのことがこのような結果に繋がってきているのかなというふうにも考えているところです。

一方で、小学校と同様に家庭学習の時間、それから読書が好きか、それから国語が好きかというあたりは、全国平均を下回っているということで、小も中も学力調査の結果と、この質問紙調査の結果で、やはり国語の課題とも通じるところがあり、なおかつこのことが経年ですと続いているような状況が続いているということです。このことから、何度も繰り返しになります依然としてここに課題がある。国語の授業が好きな児童生徒が少ない一方でICTの活用は進んでいます。ロイロノートなどの授業アプリの活用が進んできている状況があります。

しかしながら、このICTの活用が学習の定着に繋がっているかどうかということ、この結果から考えなければならない部分ではないかと思えます。それから読書についての課題があるという状況です。

これらの課題を解決するために次の二つの取り組みを説明提案したいと思います。

1点目が、子供たちの学力向上に向けて、そして2点目が教員の育成支援に向けて、学校職員体制の改革であります。

一つずつ詳しく説明をしていきたいと思えます。

まず1点目の子供たちの学力向上に向けてですが、全国学力学習状況調査の活用問題をそれぞれの単元の学習のまとめで活用、その

力が確実に付いているか確認、について説明します。

これまでの今後の課題のところは、もう今回は全ての領域に課題がある状況です。で、低い状況、これも先ほど言いました。これらを解決するために、特効薬的に課題をダイレクトに改善する方法として、全国学力学習状況調査の過去の活用問題等を、それぞれの単元学習のまとめで実施していただこうと考えております。具体的には、この前に提示しておりますようなワークシートを活用します。

その回答状況も市教委の方で把握をし、授業で着実に国語力が付いているかどうかを確認しながら、授業を進めていっていただこうかなと考えています。

これによって子供たちの苦手な部分をダイレクトに改善できればなというふうに期待をしています。

さらに、子供たちが読書に親しむ環境整備について説明提案いたします。

これまでも本市の子供たちは、読書に親しむ子の割合が低い状況がありました。しかしながら、国語力向上のためには、読書量を増やすことは必須であると考えます。

授業時間はもとより、休み時間などに、学校図書館で過ごしやすく本に親しみやすい、子供たちが自然と本を手にするような、環境整備の推進に取り組みたいと思っています。

市立図書館の更なる活用については、この後社会教育課からも説明がありますが具体的には市立図書館を訪問し、見学をするような形、あるいは集団貸し出し等をより一層進めていくよう各学校に働きかけたいと思っています。

さらに、学校における効果的な図書購入費の使い道の情報提供ですが、これは今年度、小学校の教科書の採択が行われまして、来年度から教科書が若干リニューアルされます。

最近の国語の教科書ではたくさんの関連図書が紹介されておりますので、それらのリストを提供して、各学校の図書購入費を使って、それらを効果的に揃えていくよう働きかけていきたいと思っています。

併せて、市立図書館にもこのリストは提供しまして、教科書関連本も入れていただくように働きかけていきたいと考えています。

ここからちょっと写真がありますので、できましたら大きい画面で見ただけたらと思います。

この提示しているこの写真なんですが、これは市内のある小学校の図書室の様子です。

新しい本の紹介。この下の段に新しい本の紹介をこういうふうに並べてくれてありますし、それから分類法ですね、図書のこの分類方

法をこうやってしてわかりやすく貼って、さらにこの分類法を活かした形で図書室を整備をしていただいているところです。

ここらも今、先生方、それから同図書委員の子供たちでいろいろと工夫をしていただいているところでもあります。

さらにこの学校では、ちょっとこれ見にくいんですけども、ここにずらっとう貼ってあるんです。これ図書室に入ったところにカウンターがありまして、そのカウンターのところに子供たち自身が、自分のおすすめの本を紹介をしている取り組みであります。

これらは今、国語の教科書でもこういった取り組みを言われているところにして、それらをうまく活用して、各学年の発達段階に応じて、図書の本を紹介しているような取り組みの例です。

各学校ではこのようにして、子供たちが本に親しめるような取り組みってというのは進んでいただいています。これらの環境を作るための整備に、私達もちょっと尽力をしたいと思っているところです。

さらにこれらの課題を解決するため、2点目の教員の育成支援に向けてについて説明いたします。まず現状について少し整理をいたします。

教員の育成支援なんですが、これまでは研修に力を入れてまいりました。具体的な研修を授業改善の研修なども実施してきましたが、残念ながら結果を見ると、子供たちの学習内容の定着、そして教員の授業力向上には繋がっているとは言い難い状況に、残念ながら結果を見るところとなってしまっているところです。さらに、この地域の学校は過疎化少子化の影響で、1学年1学級規模が増えてきております。

もう今、2学級があるのは金山小学校ぐらいで、あとはもう全て1学級になっております。

小学校では正規の教員は全員担任を持っていたり、中学校でも教科担任がその学校で1人しかいない、数学の先生が1人しかいないとか、国語の先生が1人しかいない、そういう状況がありまして、校内で教員同士の横の繋がりが持ちにくい環境になってきています。

特に小学校でその傾向が顕著となっていて、新規採用の教員も1人で今学級担任を持っているというような状況があります。

さらに現状なんですが、小学校では個別の対応が必要な子供が非常に増えてきています。

そのような中、そういう子供たちが多い学級、そこを経験豊富なベテラン教員がしんどい学級というような言い方をするんですが、そういったところを受け持ち、それをそのベテランの教員が抱え込んで日々過ごすことに精一杯になっている状況も散見されます。若手

教員がその職場内で、ベテランのそういった先生に指導法についての指導を受けることなどを遠慮してしまっている。すごい大変なところを持っていただいているので、今日も家庭訪問している、今日も保護者対応している。そんな中で、中々聞きたくても聞けないというような実態があったり、今度は逆にベテランの教員も、若手教員を育成をしていくという状況になりにくい、そんな状況があります。

一方で、若手教員を中心に今市内ではICTを活用した事業が非常に進んできています。

しかしながら、このことも学力調査の結果には繋がっていない状況があります。こういった現状を踏まえて、今回新たな取り組みをちょっと提案したいと思っています。小学校でのチーム担任制の導入です。

これは小学校の複数学年を複数教員で担任する方法です。具体例としてちょっと図で示させていただきました。これはある学校を想定し、5、6年をベテラン教員のA先生から5年生が若手のB先生、というような形で実際の担任としてはそれぞれの学年を受け持つんですけども、この2人で、例えば国語と社会はもう5年生も6年生もA先生が持ちます、算数と理科はB先生が持ちます、というような授業を教科によって持ち合う形をとってもらおうかなと思っています。

これがいわゆる教科担任制に近い形になるかなというところなんですけども、この取り組みによって期待したい効果として、ベテランと若手のコミュニケーションが自然と形成されて、互いの考えや授業方法などが共有しやすくなるんじゃないか。それから、若手教員の育成支援を図るとともに、ベテラン教員がミドルリーダーとして指導力向上も図ることができるかなというふうにも考えています。さらには、若手教員の持つICT機器の技術などを、ベテラン教員と共有ができるかなと考えています。これらにより、子供たちの学力向上に繋いでいけるんじゃないかと考えています。

これの具体的な取り組みとしまして、来年度令和6年度の市指定の学力向上研究指定校にこのチーム担任制を実践していただいて、成果と課題を検証したいというふうに思っています。来年度の研究指定校は木本小学校を予定しています。

実はこのチーム担任制については、学力向上の研修会でここ数年、招聘をしているんですが、ここ数年といいますか10年以上お願いをしているんですが、元三重大学教育学部教授で、現在、武庫川女子大学教授の森脇先生との打ち合わせの中から、このアイデアが出てきました。

研究指定校の木本小には、その森脇教授を複数回招聘し、指導助言もいただきたいと考えているところです。

さらに来年度の検証を基に、令和7年度の研究指定校にも同様の職員体制を組みながら検証していきたい、というふうに考えています。

そして、検証結果がよければ、小学校におけるチーム担任制を熊野市のスタンダードにし、持続可能な取り組みとして続けていければなというふうに考えています。

ただ、この取り組みは、学力向上ですぐに結果には結びつきにくいかもしれませんが、じわじわと効いてくる漢方薬のような形でいけたらなというふうに考えているところです。

その他現在市内の学校には様々な状況があります。先ほども触れましたが、支援の必要な児童生徒がやはり増加をしております。それから全国と比較をすると、数としては少ないんですけども、不登校児童生徒の増加。これも完全な不登校というよりは学校まで来ても、教室に入りづらい児童がいたり、生徒がいたり、そういうこともあります。

さらには子供の数の減少、そしてこれはもう全国的なところなんですけど、教員不足等々があります。これらの状況への対応にも今日提案をさせていただいた取り組みが良い状況に少しでも繋がればというふうに考えています。

学力向上の推進と教員の育成支援の実現に向け、学力向上の結果に直接繋がるであろう特効薬と、この地域において持続可能な形をとる漢方薬をバランスよく処方していきたいというふうに考えています。以上です。

雑賀総務課長

はい、ただいまの事項につきましてご意見、ご質問等をいただきたいと思えます。

いかがでしょうか。

はい、糸川委員どうぞ。

糸川委員

数字の表し方なんですけど、すごくこのレジュメが見やすくていいと思うんですけど、経年結果の小学校とか中学校の表し方なんですけど、何%、何%っていうふうに表すと、数字で何ポイントとかかって下に変えてくれてますけど、これをこう、なんていうかな、棒グラフで表した方が、過去からのこの高さ、低くなってるとか高くなってるとか、全国と三重県と熊野市っていうのがわかりやすいのじゃないかなって思いました。

あともう一点なんですけど、この三重県と全国っていうのはそんなに差が無くって、熊野市っていうのはその中でもすごく低いです

よね。その熊野市が入った状態での三重県の数値が全国と変わらないっていうことは、三重県の中に、もう全国よりぐっとできる市町村があるっていうふうに考えられますよね。その市町村はどこなのかなって思って、何か前に聞いたときに、ちょっと何か特定できないみたいなことを言われたような気がするんですけど、でもそれが特定できないんだったらこういう結果を表す意味がないんじゃないかなって思って、いいところを参考にして、何かいいとこ取りっていうか、するためにも、何かそれを知れる方がいいんじゃないかなって思うんですけど、その辺はいかがでしょうか。

雑賀総務課長
伴学校教育課長

学校課長よろしいですか。

ありがとうございます。グラフ化についてはおっしゃられるとおりで、ちょっと見える化のところを考えていきたいと思います。それから実は、県と熊野市の差が非常に大きくなっていうところなんですけど、大変残念な状況ではあるんですけども、実は熊野市の母数としては6年生で約100名前後です。これは北中勢の市町へ行くと、1校分にしか当たらない。もっと言うと、1校でもっと多い学校もあるぐらいの規模の差があります。ですので、うちの数字が県全体の数字にあまり大きな影響を与えてはないってというのはこのデータの部分では言える部分です。あと市町別の部分については、大変申し上げにくいんですが、私自身も実は県の方にも行っておりましたので、そこでの状況というのは把握はしているんですけども、各市町は市町毎に公表をするのは良しという形で、私どもも熊野市として公表はさせてもらってるんですけど、各市町のデータというのはそれらを集めてきてというのは可能ではあるんですけども、県全体の中で市町を一覧で出すとか、そういったことはしないことになっておりますので、言うたらどこができるかできないかっていうのは、ある程度僕らも把握はしていますが、この場でちょっと言うことは差し控えさせていただきたいなというところですよ。

ただ、先ほど言っていたように、参考にっていう部分で言うと、実は非常に高い地区、ある町で非常に高いところがあります。その学校は1町で1校の学校です。児童数が1,000人規模の学校です。1学年がもう150人以上200人弱のところ、クラス数がたくさんあります。そうすると先ほど言いましたチーム担任制は、そこら辺との比較から出てきた考えでもあります。1学年の中で複数の先生、その先生は複数の学級がありますので、複数の先生が入ります。当然、ベテランの先生と審査員の先生とか、バランスよく配置されて、その中でいろんな研修も学年の中でできているような状況がある。そういった状況が、実は私自身も経験をします。私は、鶯殿小

学校がふりだしだったんですが、そのときまだ鶯殿小学校は3学級規模でした。新規採用のときは、ベテランの先生2人と私でした。もうベテランに先生ずっといろんなこと教えてもらったんですけども、今なかなかそういう形がこの1学年1学級っていうのが作りにくい状況があるので、無理やりという言い方も変ですけども、意識的に作ってそういうことを少しでも解消できないかなと。そうすると、例えばパソコンを使うことも、ベテランの先生もするようになる。さらにこの市内の中でも、やはりベテランの先生のこれも一概には言えないんですけども、ベテランの先生の方が傾向として、学習内容の定着はきちっと押さえていただいている傾向があります。そういったことをうまく融合が、その高いところなんかはもう自然とできているんですよ。そういったこともちょっと意識的にできないかなっていうところで、そういったところも参考にしながら考えたということでございます。

糸川委員

もう一点いいですか。そしたら三重県内の市町の結果を表すことはできないにしても、この近隣の尾鷲市であったり、御浜町であったり、この熊野市となんか条件がよく似ている近隣の小中の結果っていうのはどんな感じなんでしょうか。

雑賀総務課長

はい、教育長どうぞ。

倉本教育長

東紀州教育長会議というのがございます。そういった中で各教育長と話す中で、東紀州は学力の部分で共通の課題があるという話し合いがよく出ます。そういった中で、各市町の公表がない中で個別に話す、例えば担当クラスで話す、教育長レベルで話す程度です。過去にはある程度、学力学習状況調査の結果が全国平均を上回っている地域に教育委員会として研修に行ったことがあります。教育委員の研修にも行ったことがあります。

例えば松阪であるとか、北勢の方へ行ったことがございます。

その中で、得る内容がありますし、それぞれの地域実態が違うので、あまり参考にならない部分もございます。

だからこの地域の子供たち、地域実態に応じた対応をしていかなければならないというふうに思っております。

例えば、読書量が非常に少ないという部分では、心を揺さぶられるような本になかなか出会えていないのではないかと、幼少期から「おはなしなあに」とか、そういった社会教育講座で行っております。

集団貸し出しを行う制度もあります。

そういったことは校長会であるとか、いろんな場で紹介するんですが、学校によっては貸し出し率の低いところもございます。

だからもう一度ですね、各学校での子供たちがいろんな本と出会う

場面を増やしていきたいなと思っております。

糸川委員

ありがとうございます。ちょっとさっきのよくできる学校は先生もたくさんいて生徒数も多いというふうにおっしゃってましたけども、そしたらこの熊野市だけで今この熊野市の学力向上というお話ですけども、熊野市だけを考えるのではなくて、尾鷲から御浜町とかを含めた感じで、この地域全体の子供たちの学力を上げるっていうふうに目先を変えて、御浜町とかの人たちとタッグを組んでそういうふうには先生同士が何かお互いを高め合うっていう取り組みはできないのでしょうか？

伴学校教育課長

ありがとうございます。横の連携については、まだ各市町とも相談をしていきたいと思っておりますが、とりあえず今、熊野市の中ではこういう形で取り組んでいきたいというふうに考えていますし、今提案ありましたが、担当レベルでも、それから今年度の学力向上でもやらせてもらったんですが、今回学力向上の研修会の中で、中学校の数学の先生に特化をして市内の先生方を集めて授業作りの研修をやりました。

そしたらやはりベテランの先生は若い先生に対していろんなアドバイスをしているような状況もその場でも見られましたので、こういった取り組みを各教科あるいは今言っていたように市町を越えた部分も考えていければいいねっていうような話はしているところであります。

糸川委員

続けていいですか。その算数の授業がよくわかりますかっていう熊野市の回答率で 94%の子供がよくわかるっていうふうに答えてるんですけども、実際の点数になると、56%の正解率になって、子供たちは理解はしてるけども、テストで結果を出せないっていうことはそのテスト慣れしていないっていうことなのかなとか、何かこのなんかすごくいい感じで書いてますけど実際の結果は出てないっていうのはどういうことなのかなっていうのもちょっと疑問に思いました。

伴学校教育課長

おっしゃられるとおりで、我々もそこについては検証をしているところです。いくつか考えられるんですけども、ちょっと授業のですね、実はこの地域の先生方非常に丁寧に授業していただく傾向があります。

人数が少ないがために、本当にこの子がわかる、皆がわかるようになるまでやっただいていう実態があります。

ただ、その実態がこの数字になっているんですが、逆に言うともわかるようになるための授業の内容が、難しい内容を削っている可能性があるということになります。

それが今回の学力調査の活用問題のような、いわゆる基礎の問題があった上での活用ができるかっていうところがちょっと弱い可能性があるかなということで今回特効薬として、この活用問題をやるっていうことを提案させてもらっています。

雑賀総務課長
倉本教育長

教育長どうぞ。

今、学校教育課長が削っているという表現をしましたが、一応ですね、学習指導要領指導書に沿った内容は指導しております。

その上で、より難しい課題に挑戦させているかというところが問題になってくると思うんです。その部分がですね、そういうものに挑戦して苦しんだ場合には、算数はよくわかるというような数字はこんなに出てこないと思うんです。ですから、一定のレベルで理解している。ただ、それ以上の難解な問題についての取り組みであったり、チャレンジさせるというような場面は少ないのかもしれないということでございます。

それからもう一点ですね、教育委員会会議でいろいろお示しさせていただいております、この場ではですね、今後の取り組みに向けてこんなことをやったらいいのではないかと、こういう視点があるのではないかとというようなことも含めてですね、お話をいただくとありがたいです。

雑賀総務課長
根引委員

根引委員どうぞ。

関連する部分ですけども、わかるためにはやっぱり、より活用問題のリピート学習、これは大変必要だなと思います。やっぱり何回も何回も繰り返して活用問題をやるのが大事だと。今の特効薬と言われましたけども、単元学習のまとめを活用ですか、各学校でこの単元領域のまとめを各学校でするのか、それとも一緒に教育委員会で行って学校に示すのか、やっぱりそこらの部分をきちんとしていかないと振り返りながら出来にくいと思います。そこをちょっとお聞きしたいと思うのと、2点目、教員の育成支援の部分でも、TTという制度があると思うんですけど、チームティーチング、その制度をもう少しこれから活用できたらいいんじゃないか、今までどおりじゃなしにね、少し新たな手法で活用できたらいいかなというふうに思います。

もう一点は、小・中学校という形態の学校もあるんですけども、中学校の専門の先生、例えば、英語、数学、何かの先生を小学校の子供たちにも活用できる部分があると思うんですけども、反対に言えば小学校の先生も中学校に活用できる場合もあると思うんですけど、そこらの活用もしながらいければ、少し広がりを持てるんじゃないかなと思います。

雑賀総務課長
伴学校教育課長

伴課長いかがでしょう。

ありがとうございます。活用問題の繰り返しについては本当に言われるとおりで、今学校にはその単元学習にその領域の単元学習のときにこういう問題をやってくださいっていうふうに、うちから提起をしています。

もう具体的なプリントで提起をしています。それを複数回繰り返しやること、加えてその結果をですね、こちらも提出いただくような形でちょっと着実にやってもらおうかなというふうに考えて、この間の研修会でもそのように提起をさせてもらっているところです。ありがとうございます。それからTTの活用の部分なんですけど、今現状で特に小学校でいうと、学級にいわゆる正規の教員が担任する学級に非常勤の方がTTに入っている現状が多くあります。残念ながら今教員不足が非常に進んでおまして、非常勤の教員の方ってというのは、退職された先生とかずっと講師をされている年配の先生とか、そういう方が多い傾向が出ております。ですので、どちらかというところTTではそういう組み合わせにどうしてもならざるを得ない状況があります。もう少しそこら辺も余裕が出てきたら、さっきご提案いただいたような形を、チーム担任制の中で非常勤の方に5年生に授業に入っていて、その間にT2として若い先生が先生のベテランの先生の授業見るとか、いろんなそういう工夫はさしてもらえたらなというふうに思っています。

それから最後に小中連携なんですけど、今現在、市内では一部の学校で小・中連携でやっていただいている学校もあります。具体的には新鹿小・中学校です。ここは併設校ということもありまして、中学校の先生が小学校の複式解消に入っていていただいているような形で連携をとらせていただいているところなんですけど、委員ご提案のとおり、他の学校ではなかなかちょっと今進んでない状況もありますので、また今後検討していきたいなというふうに考えております。以上です。

倉本教育長

貴重なご意見ありがとうございます最後の部分のですね、小学校の教員が中学校を兼務する中学校の教員が小学校を兼務する、特に小中併設校ではやりやすいように思うんですが、小学校と中学校の授業時数がずいぶん違いましてですね1人当たりの。小学校から中学校へ行くのは非常に困難がございます。

ただし中学校から小学校に行くのは行きやすいという表現は間違ってますけど、行くことができると。私以前、小中併設校の校長をしておまして、その折は中学校の職員が小学校の2教科ぐらい入りました。小学校の教員も、例えば、体育の一部分であるとかですね、限られておりますが、そういったことで連携したことがございます。

どちらかというところから中へ行くのは非常に困難と言わざるを得ない状況です。中学校の方から小学校へ入って先行投資ということですね。いずれその子供たちは中学入ってるから来るから、子供の理解を深めたうえで迎えることができる中学校へ。そういった話し合いを続けて行っておりました。今後も、その辺については単発的にはですねWEBを使ってインターネットを使ってやったりは行っておるんですが、連続性というかですね、継続性は今のところございませんので、そこを取り組んでいきたいと思っております。

雑賀総務課長
北野委員

よろしいでしょうか？他の委員いかがですか。

19 ページのところの具体的な取り組みのところなんですけれども、令和6年度から木本小学校でやられることなんですけれども、これ木本小学校だけではなしに、井戸小とか金山とか有馬小学校とか、規模の大きな学校で同じように進めていくことはできないものなのかちょっとお聞きしたいと思っております。

雑賀総務課長
倉本教育長

教育長からお願いします。

文部科学省は今、教科担任制というものを進めております。ただ、その教科担任制が熊野市のこの中規模、極小規模校の中では運用がなかなか難しい。ではどういうことができるんだということで、このチーム担任制というところを実施していくということです。

まずうまくいくかどうかを検証するために、木本小学校で行ってみる。これがですね、うまくいった場合はもちろん、北野委員おっしゃるように、学校教育課長が申し上げたように、熊野市のスタンダードとして継続して進めていきたいと思っております。

雑賀総務課長
高見委員

はい。では高見委員お願いします。

関連してなんですけど、複式学級の学校の場合はどういうふうなふうになるのか、ちょっとお聞かせいただければと思います。

雑賀総務課長
伴学校教育課長

はい。伴課長お願いします。

実は複式学級のほうも、来年度は研究指定を行います。来年度については入鹿小学校を研究指定にしようと思っております。ここでは複式授業のスタンダード化ということで、また取り組んでいただこうかなというふうを考えております。

それから先ほど北野委員からもありましたが、来年は木本小学校でやっていくんですが、再来年は井戸小を予定をしております。先ほど根引委員からもありましたそのTTの部分で、やはり人を配置をしたいなということもあって、県に強く働きかけをしております。これは木本小が研究発表するための人ということで、研究をするための人ということで強くお願いをしているところでして、やはりそういったことも全ての学校で一気にやるのはちょっと難しいため、順

番にやっていった上で全体に広げていければなというふうに考えています。

糸川委員 それに関して、まずは木本小学校でうまくいくかどうかということですが、そのうまくいくって何か基準は、もう設けているのでしょうか。

伴学校教育課長 基準は特にありません。今のところ。これからやっぱり基準も考えていかなければいけないというふうに思っていますが、先ほども言いましたように、ちょっとこれ漢方薬的な、じわじわと聞いてくる形になるかなと学力調査の結果とかで、本当は見たいんですけども、すぐにこの効果が出づらくなっていうところで、先ほど申し上げたように、なかなか基準を決めかねているところなんです。ただ、木本小の先生とも既にこのことは打ち合わせをしまして、やってみようじゃないかというような形で先生方もちょっと前向きになっていただいておりますので、まずはその先生方のそういった感覚ですねアンケートを取ったり、あるいはこれが効果的だった、すごく良かった、勉強になった、というような部分は検証はしていきたいなというふうに思っています。

糸川委員 わかりました。ありがとうございます。

それで、今後の取り組みに向けての忌憚のない意見をいただきたいというところに関してなんですけども、これはちょっと市長にお願いになるかもしれないんですけども、熊野市で今まで学力向上に向けてのいろんな取り組みをしてきたと思うんですけども、なかなか目に見えて効果が出てるとは言えない状況の中で、熊野市としては、その子供たちに何か他に特化した教育というか、をされてはどうかかなと思って、それで私がちょっと考えたんですけど、その英会話に力を入れるっていうことで、何か英語って文法であったり英作力であったりっていうその書く力っていうのは、難しいかもしれないんですけども、一般的には日本人の子供で日本語が喋れない子供っていませんよね。英語圏の国の子供で英語が喋れない子供っていませんよね。ということは、英語は喋れるものだっていう感覚でその英会話に力を入れるっていうのはどうかかなと思って。

今でもそのALTの先生とかいらして、何か英語を小学校からやってくれてますけど、もっともっとその何か生きた英語って何か話せる英語に力を入れるっていうことで、そしたらもうそういう環境が整うと、何か子供たちも英語に触れ合う、英語を聞く機会が多くなれば、なんかいいんじゃないかなと思って、そうすると自分たちはよその市町村の子供より英語が喋れる、なんか僕たちはすごいんだってというような子供の自信にもつながるし、親も話せないから、親よ

りすごいって何か本当に子供のなんか自信がどんどんつくと、結局はこの学力、英語力、算数であったり国語であったり勉強するっていう意欲が湧くのじゃないかなって思ったので、これはその英語の会話をできるような環境作りのための予算をつけていただくのはどうかなって思いました。

河上市長

基本的な考え方として英語がいいかどうかは別にしてですね、私が市長になってからやっぱりとにかく本を読んでもらいたいということで、市長になってからすぐ、若干他の近隣の他の自治体に比べて、子供たち学校における子供たち 1 人当たりの図書購入費が低かったのを一気に伸ばしたり、ベースとしてこの図書館を建設したりというのはですね、やっぱりそういう本を読む環境を市として力を入れていかなきゃいけないだろうと、そういう強い思いがあったんで、これまでいろいろと予算を伸ばしたり、実際にこういう形で図書館を建設したりしてやってきてると。そういう中であって、後で質問しようと思ったんですけど、朝の 15 分ぐらいの間に必ず本読むっていうことをまだやってもらってるのかどうか、これ後でいいんですけど。とにかく私自身はですね、私はあの海外の経験もあるので、糸川委員おっしゃる英語の大切さは、非常に自分は身をもって認識してるんですが、ベースとして英語が全てのベースになるかっていったら、少しちょっと異なる意見を思ってます。ただ、英語をものすごく勉強したいという子供たちを応援すると。広く全ての子供たちに英語英会話を学ばせるということとは別にですね、やっぱり英語に非常に関心を持っている子供たちの能力を伸ばす機会を作るのは、当然やらなきゃいけないだろうという思いがあります。そういう思いでは ICT 教育、IT 教育の取り組みが始まってから、やっぱり学校でこの IT を使った教育を行うだけじゃなくて、IT そのものがですね、好きな子供もいるんじゃないかと、こういうことも踏まえて、学校以外で IT を遊びながら学べるようなそういう仕組みを今作っております、未来の先生なんかにも協力をいただいているということでございます。英語を含めて今の IT でありますとか、他の、例えば囲碁の中でも実はそうなんです、子供の特性に応じて伸ばせるべき部分はできるだけ伸ばしてあげようという思いはあります。だから英語がいいかどうかはですね、教育委員会で十分検討していただいてやってもらえないんだろうなと思います。一方で私は個人的には、やっぱり本を読むことが基本じゃないかなっていう思いは強くあります。

英語に関しては、私の独断と偏見で言うとはですね、英語って数学ができると非常にできると思います。要するに、さっきちょっとお話し

やった文法は、日本語よりも遥かにしっかりしてるんで、文法がはっきりわかる要するに数学的な原理原則がわかると、英語も非常に理解しやすいだろうなってそういう意味では教え方によっては、確かに全ての学びの基本なのかもしれません。数学的な思考があると、実は本読むのは私は個人的には、非常に速く読めるようになるんだろうなとそういう思いもあるんで、この辺はいずれにしても、何がいいか、何が基本としてベースとして子供たちの学力を伸ばすために役に立つのかは、これは専門家集団の教育委員会で十分に考えてもらって、少しでも糸川委員の前向きなご指摘に、応えられるようにしていかなきゃいけないだろうというふうには思っています。

先ほど来、私ご質問しようとしたことはほぼ皆さんで質問していただいているんで、一つだけさっき言った、朝読書をやってますかって話で、もう一つだけICTの利用がやっぱり多いのにも関わらず、学力に結びついてないってここの説明はなかったんですけど、この辺はどう考えてるんですかね。

雑賀総務課長
浦坪指導主事

先ほどの市長からいただいた件どうぞ。

学校教育課の浦坪です。よろしくお願ひします。朝読書については、市内、八つの小学校、五つの中学校あるんですが、スパンはまちまちなんですけども、全ての学校で取り組んでいただいています。朝の時間 10 分から 20 分の間を使って、心を落ち着けて本を読むということで学級内に用意している本であったり、あるいは図書館から持ってきた推薦された図書についてそれぞれが読む活動を行っています。またこれとは別に、小学校の低学年を中心として、読書の時間というのを設けてその中で読み聞かせを行ったり、あるいは子供たちが読書を行うという取り組みを市内の小学校でやっております。

伴学校教育課長

続いてICTの利用と学力の部分なんですが、実はICTロイロノートを使って授業をやっていただいています。その中で授業の目的をしっかりと持って、このことを理解させるために、このICTを使うっていうような部分が、まだちょっと強く持ててないかなっていうのが僕らの認識ですつまり、今、形として使えるようにすごくなってきています。

そういう意味では、過渡期に入ってきたかなと。特にベテランの先生とのそこを融合を図ることで、学力向上に繋げていければなというふうには思っています。

それから、一点だけすいません会話の件で、今教育委員会としては三重大学と連携をしまして、フォニックスといいまして、英語の音と文字を繋ぐ手法で、子供らがかなりスムーズに入っていくやすい、例えばAという単語があったら「エー」ていうんじゃなく、「ア」てい

うふうに言う。というような、そういう指導法について小学校を中心に進めております。以上です。

雑賀総務課長

ご意見尽きないところではありますが、予定していた時刻も少し超過をしているような状況でございます。先ほど来、出ております読書に関する事項にも関わりますので、2項目目の「生涯学習施設としての図書館のあり方と具体的な取り組みについて」に移って行かせていただいでよろしいでしょうか。

では社会教育課長から説明をさせていただきます。

柳本社会教育課長

社会教育課柳本と申しますよろしくお願いいいたします。通し番号の21ページをご覧ください。

社会教育課では、生涯学習施設としての図書館のあり方と具体的な取り組みについて、説明させていただきます。

ひととおりの説明させていただいた後、委員の皆様のご意見、ご提案等をいただきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいいたします。

まず地域に出向く活動ということで、説明させていただきます。26ページの資料1をご覧ください。

地区別貸し出し人数というふうに書いておりますけれども、これは令和4年度のデータとなっております。市街地に住んでいる方の利用が多くなっております。例えば、有馬町とか井戸町、木本町、久生屋町が多いんですが、山間部、海岸部の利用者が少ないというのがわかっていただけると思います。図書館では、地域に偏りなく多くの市民に図書館を利用していただくための取り組みを行っております。21ページ戻ってください。その取り組みの一つとしてですね、まず出張図書、リサイクルブックの提供ということで令和4年度から取り組みを行っております。

図書館の利用者が少ない地域に出向き、市の出張所において一定期間、図書の貸し出しとリサイクルブックの提供を行うといったものです。昨年度は育生出張所、今年度は飛鳥出張所で行ってまいりましたが、今後他の地域でも実施していきたいと考えております。

実績についてですけれども、令和4年度育成出張所では、貸し出しが5冊、リサイクルブックの持ち帰りが17冊。令和5年度は飛鳥出張所では、貸し出し6冊、リサイクルブックの持ち帰りが60冊となっております。約50冊の貸し出しの方を持って行っております。また、100冊のリサイクルブックも持って行っております。そういった中での結果でございます。

検討課題といたしましては出張サービスを行うことで、地域格差をなくす取り組みを試みていますが、貸し出しについては十分に期

待できる成果を上げておりません。

どうしたら借りる人が増えるかということを図書館の職員の中で話し合いました。

図書館では人の顔を見ることができるので、よく利用される利用者にカウンターで意見を聞くことができます。

しかしながら出張所では顔見ることができません。小説、農業、ガーデニング、レシピ本、手芸、歴史など、図書館で中高年に人気ある本を選んでおりますけれども、実際にどういう本を希望しているのかわからない状況となっています。この問題を解決するには、出張所で本を借りられる住民にアンケート調査を行い、地域ごとのニーズを把握し、回数を重ねることで情報をストックしていく必要があると考えております。また、図書館だよりを作って、人気がある本の紹介や新刊を紹介することも、一つの手であるという意見も出ました。続きまして 22 ページをご覧ください。

次に図書館を楽しむ活動方法について説明させていただきます。新たな図書館の魅力を知ってもらい、より多くの方に図書館を利用していただくきっかけ作りを目的として取り組む1のナイトライブラリーを令和5年度から実施しております。中身に関しては、大人を対象としたナイトライブラリーでは、図書館閉館後、照明を暗くして朗読を聞いたり、映画を見たり、あるいはゆったりとした気持ちで読書を楽しんでもらうものです。

また、子供とその保護者を対象としたナイトライブラリーでは、本探しゲームなどを楽しみながら、本に親しんでいただく内容となっております。

令和5年度では大人向けに4回、子供向けに2回の計6回のナイトライブラリーを実施する予定でございます。実績といたしましては、令和5年度の第1回参加者で、大人向けの朗読なんですけれども、20名の参加がありました。子供のナイトライブラリーでは、本探しゲームをいたしましたけれども、12名の参加がありました。第2回ですけれども、大人のナイトライブラリーでは映画「道」を上映いたしましたして、34名の参加者がございました。

今後の予定としましては、大人のライブラリーとしましては第3回は朗読、そして第4回はミニコンサートとブックカフェを予定しております。子供のナイトライブラリーでは、第2回 夜の図書館探検というものを実施することとしております。

このナイトライブラリーですけれども、図書館でこれまでできなかったこと、やったことがないことに挑戦することで、図書館の魅力を引き出したいと考えております。

例えば、過去に熊野市コンサート事業の協力という形で、図書館閉館後に図書館を開放したことがありましたけれども、今回、図書館の独自の事業として、朗読や映画の上映は初めての試みでございます。また子供のナイトライブラリーでは本探しゲームを行いました。これも初めての試みですが、子供たちは一生懸命になるあまり、図書館内を駆け出す子まで出てきました。普段なら図書館で走ることはできませんけれども、夜の図書館だからこそできることだと思っております。

2月開催予定の大人のライブラリーでは、ハーモニカのミニコンサートを行う予定です。また、コーヒーを提供し、ゆったりとした気分を味わってもらいながら、音楽を楽しんでいただくという計画で企画をしております。

次に、取り組み2ですけれども、大人向けの当初見学会、これは新しく提案するものでありますけれども、大人向けの図書館見学会をやりたいと考えております。これまでではですね、小学校による図書館の見学会がありますけれども、今のところ、大人の見学会はありません。そこでですね、スマホから図書検索とか、図書館での検索方法を説明したり、普段見ることができないボランティアルーム、閉架書庫等を見学するといった内容を考えております。ボランティアの人材確保のため、毎年活動紹介のパネル展などを開催していますが、その際に大人向け図書館見学会を取り入れて、実施することも可能だと考えております。

検討課題といたしましては図書館を身近に感じてもらうため、令和5年度からナイトライブラリーを実施し、令和6年度には、大人向け図書館学会を実施することを検討しておりますけれども、教育委員さんの目から見た図書館を楽しむ、あるいは図書館の魅力を伝える取り組み等が他にもありましたら、後でお聞かせいただきたいと思います。

続きまして23ページをご覧ください。図書館利用者を増やす活動についてですけれども、高校生の読書活動の支援事業ということで、令和5年度から力を入れていきたいと考えておりますけれども、27ページの資料2をご覧ください。年齢階層別貸し出し冊数という表なんですけれども、見ていただくとですね、15歳から17歳2,513冊18歳から19歳まで761冊ということで、周りの年代から見るとかなり少ない良い数字となっております。

そしたら23ページにお戻りください。取り組み1としてですね、木本高校は、三重県教育委員会事務局社会教育の文化財保護課が主催の「本を読もう読書活動推進事業」のモデル校となりました。木本

高校から熊野市立図書館から様々な取り組みに関するアドバイスが欲しい。また、熊野市立図書館と情報交換など、繋がりを持ちたいとの依頼がありました。熊野市立図書館としましては、木本高校の読書活動に関する紹介時などのスペースの確保や、アドバイスなどを情報提供等も可能であると、さらには来館者の増加、読書を通じての学力向上、豊かな人間性の形成など、木本高校と熊野市立図書館の取り組む方向性が一致するところがあるので、協力を惜しまず、互いに課題に取り組んでいきたい回答をしております。協力することはですね、熊野市立図書館及び木本高校の図書館において、次のことが期待されます。来館者を増やすなど、図書館を活性化することができる。また、生徒が読書に親しむことで、確かな学力豊かな人間性を育むことができる。そして、読書を通じて家庭や地域と一体となった取り組みを展開することができるなどございます。検討課題としましては、15歳から19歳の貸し出し冊数が少ないのが現状です。今回の木本高校との連携で、高校生を含めたより多くの青少年に図書館に興味を持ってもらいたいと考えております。先日、木本高校を邪魔しまして、司書さんとお話をいたしましたところですね、利用者なんですけど、昼休みが少なく、放課後が多いということです。また、借りられる方なんですけども、進路関係の本、小論文の書き方とかそういう本をですね読む生徒が多いとおっしゃってございました。

高校生の図書館利用を増やすためにということで、木本高校の取り組みなんですけれども、例えば定時制の生徒のためにですね、開館時間を19時まで延長したりしております。また、本置く配置を変えたり、またあのテーマごとのコーナーを作ったことで、新書、本屋大賞、映画化された本が借りられるようになったということです。他には、表紙が見えるように棚に置いたりですね、POPをつけたら借りるところまでいかななくても、手に取る回数が増えたということです。

木本高校との連携といたしましては、現在高校に無い本や、事業で行う読み聞かせの絵本など市立図書館で借りております。

また先ほど申しましたように、木本高校の図書委員がですね、熊野市立図書館で選んだ本のポップを作り、展示することになっております。

私もですね木本高校の図書館にお邪魔したところですね、本を手に取りたくなるような工夫が随所で見られました。木本高校とのお付き合いは始まったばかりですので、情報交換をしながら、これからできることを検討していきたいと思っております。

続きまして24ページをご覧ください。図書館読書に興味を持っていただく活動として、19の事業を挙げております。これら事業をや

ることですによってですね、検討課題としましては、他の市町の図書館に比べ、数的にも内容的にも充実した事業を実施していると思っております。今後も引き続き、図書館の魅力や読書の楽しさを伝えるためには、現在のイベントを維持しつつ、よりニーズに応じた内容の事業を展開していかなければなりません、職員の負担もより多くなることも課題の一つとなっております。

次に 25 ページをご覧ください。実施しているサービスとしては、他市町への連携ということで、三重県立図書館はじめ、三重県下 40 館以上の図書館や、県外からも多く借り受けしております。

次に予約リクエストサービスについてですけれども、お探しの本が無い場合はですね、図書館が所蔵している本が既に借りられている場合は、予約することもできます。

次に (3) レファレンスサービスですけれども、図書館は本の貸し出しだけではなく、利用者が求めている情報や資料を提供提示しております。

人材の育成については、職員 3 名のうち司書 1 名、残り 2 名は今年度からの採用となっております。新人職員は、ベテラン職員による指導を中心に、専門能力、業務知識等を学んでおります。サービス等の質が落ちないように、対応してまいりたいと考えております。

最後になりますけれども、図書館の方ですね考えた、生涯学習施設としてのあり方、魅力についてですね、考えました。

5 つ考えております。あらゆる市民にとって、身近で利用しやすい図書館とかですね、地域の情報を拠点として、魅力ある蔵書や資料収集、提供されるとともに、市民 1 人 1 人が必要な情報を、容易に得ることができるような環境が整えられているとか、あとは子供たちの読書活動の推進の充実化を図るため、学校等との連携、そして良書と巡り合えることができる読書環境が整備されている。他にですね、本や読書活動をきっかけとした人との繋がりを築くことができる。最後になりますけれども、居心地が良く、安心できる空間である。このようなことを考えております。

これまでですね、説明させていただきましたけど、図書館では工夫を凝らしながら、住民の皆さんに良い図書館の魅力を伝えようと、努力しているところでございます。

最後になりますが、各項目での皆さんの意見やアイデア等を多く伺いしたいと思っております。併せて、今後の図書館のあり方、事業の展開の視点等についてのお考えをお聞かせいただきたいなと思いますので、よろしく願いいたします。

雑賀総務課長

この後の予定もございまして、正直あまり残す時間がないという

状況でございますけども、委員の皆様ぜひご意見ご質問などいただきたいと思います。

高見委員 お話の中で 15 歳から 19 歳の貸し出しが少ないっていう現状やっ
たんですけど、この年ってのはやっぱり、進学や就職っていうことに
どうしても頭が行きがちだと思うんです。そういった子供たちを対象に、
進学や就職に役立つコーナーみたいな、こんな本がありますよ
っていうの、そういうコーナーを作ってもらったらどうかなって。

柳本社会教育課長 そうですね。図書館においては、問題集とかですねそういうのは置
けないことになっております。ただ今後ですね、高校生対象にした、
そういう勉強になるような、ためになるような本も置いていきたい
なと思います。

高見委員 成功した人の伝記であったりとか、そういったものね、コーナーを
一角に集めてっていうか、そういうふうにしてもらえたらなという
ふうに思いました。

雑賀総務課長 教育長どうぞ。

倉本教育長 高校生が、授業の終わった後交流センターで時間待ちなんかをす
る場合があります。

図書館入る子供たちは本当に少ない。入試情報なんかは学校で得
ることができ、インターネットで得ることができる。そういった子供
たちにですね、少しでも図書館入ってもらおうと思ったら、やっぱり
仕掛けとして、小学生、中学生の時に、親しむ習慣をつけさせる必要
があると思っております。以上です。

雑賀総務課長 他いかがでしょうか。

根引委員 少し外れるかわかりませんが、今、高校生の方がここを大変利用
してもらっております。

僕は大変素晴らしい施設を作っていただいたなって思ってます。
特にね、遅くまで高校生がクラブとか勉強が終わった後で、来る時が
あります。列車待ちの時間をここで過ごせる。要するに、先ほどあり
ましたけども、安心した居場所という部分では、いいなって思ってます。

それが図書館へ入ってもらったら、またいいんですけどもね。だから
高校生が大変安心しておれる場所が作ってもらってるんで、少し
ちょっとお願いしたいんですが、閉館の時間がちょっとわかりませ
んが、できるだけ融通していただいたら高校生にとってはいいかな
と感じております。以上です。

柳本社会教育課長 閉館時間に関しましては午後 7 時となっております。

図書館利用される生徒さんはですね、列車を待つためにいたり、勉
強、自習したり色んな形で利用されております。今後ですね、図書館

を利用しやすいような形をまた検討していきたいと思います。

雑賀総務課長
糸川委員

他いかがでしょうか。糸川委員よろしいですか。

さっきの14ページで見せていただいた、子供たちが本に親しめる環境っていうとこの中で、どっかの小学校で自分が読んだ本を、おすすめのポスターみたいな書いているのありましたよね。それがすごくいいなと思いました。主婦的感覚なんですけど、プレゼントをあげるっていう感じで、だからこのポスターを描いた中で、私はこのポスターを見てこの本が読みたいと思って借りましたっていう子供と、その投票するっていうか、その中で1位に選ばれたポスターの子と、その本を読んだっていうその本を借りたっていう子の中で、描いた子はもう絶対、その本を読んだ子の中で、抽選で2名とかに図書券をあげるとか、そういうふうにすると、楽しみながら本を読めるし、自分の読んだ本を他のお友達におすすすめするときの、何かただ描くだけでも、何かちょっとプレゼントがあると子供たちって頑張れるんじゃないかなって思いました。

河上市長

糸川委員とはちょっと違うというか、趣旨は一緒かもしれないけど、あれ面白いんだけど面白いだけじゃなくて、いま糸川委員が言われたと同じっていうのは、あれをこの本は私が読んでこういうところ面白かったっていうのは、描いてあった気がしたけど、それでその後、その本の貸し出しが伸びてるかどうかというチェックはされてるんですか。

伴学校教育課長
河上市長

すいません、そこまで把握はしておりません。

結局、折角すごく良い例なんで、その辺をこう調べて、糸川委員が言われるようなことに繋げられるのかどうかね、さらに読んでもらうような。そこはちょっと、1回折角良い取り組みだから、フォローしていただく方がいいんじゃないかなと。あれがこの図書館でできるか、あれ学校図書館でしょ。この図書館でできるかどうかは、もうひとひねりいるかもしれないんですけど、貸し出し冊数が伸びるように少しいい事例も含めて、念頭に置いて考えてもらったらどうかと思うんですけど。

倉本教育長

市立図書館の蔵書数が19万5000冊を超えております。市民1人当たりの冊数にすれば、県内1位であります。町入れても上位でございます。そういったものをですね、有効に活用していただくために、今後引き続き、いろんな仕掛け、いろんな切り口で進めてまいりたいと思っております。ありがとうございます。

雑賀総務課長

この件に関しまして他いかがでしょうか。よろしいでしょうか。ずいぶん予定した時刻になってまいりましたのでちょっと一点だけ、学校教育課の方から訂正をさせていただきます。

伴学校教育課長 先ほど研究指定校のことで、来年度井戸小と言わせてもらったんですが、来年度は有馬小学校の予定でした。再来年は井戸小になります。

なお、来年度は複式の小規模校として入鹿小学校、先ほどのチーム担任制を木本小学校。そして中学校は、入鹿中学校にやってもらう予定にしております。来年3校を研究して予定しています。

雑賀総務課長 よろしいでしょうか。その他委員の皆様から何かございませんか。本日様々なご意見を頂戴いたしました。これまでの成果、反省、課題なども踏まえまして、これからの事業遂行に生かしていきたいと考えております。どうぞ引き続き、ご指導いただきますようお願いいたします。

それでは以上をもちまして、令和5年度第1回熊野市総合教育会議を終了させていただきます本日はありがとうございました。